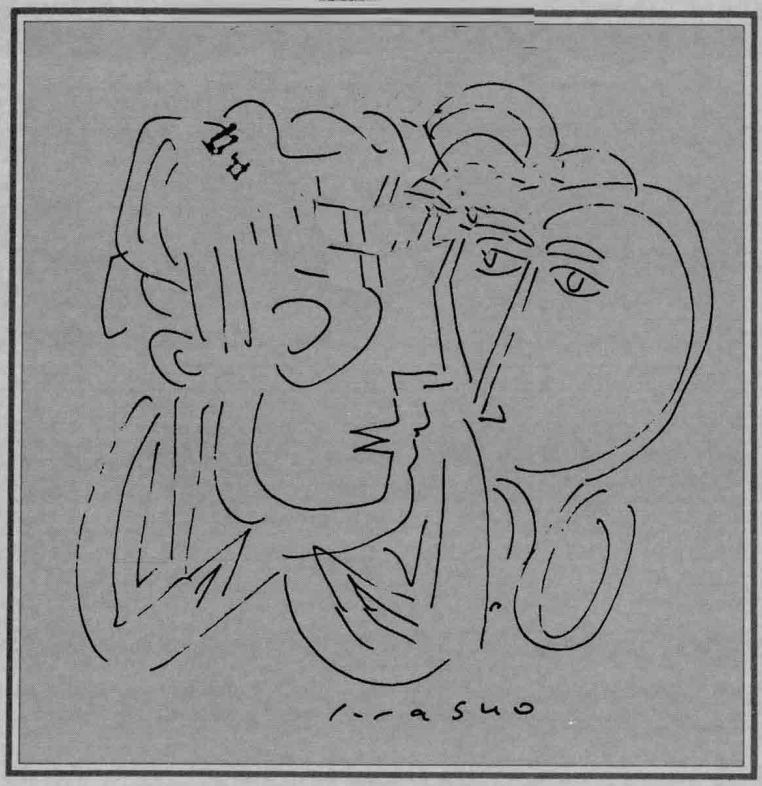
角川書店

池田満寿夫

ズボンの中の雲



ズボンの中の雲

©Masuo Ikeda, 1980
Printed in Japan
0093-872290-0946(0)

昭和五十五年十月三十日　初版発行
著者――池田満寿夫
発行者――角川春樹
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三　電話〈〇三〉二六五―七一一一〈大代表〉　郵便番号一〇二　振替東京三―一九五二〇八
印刷所――信教印刷　製本所――大口製本
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

ズボンの中の雲——目次

Ⅰ・柳の秘密——5
Ⅱ・翼のない鳥たち——41
Ⅲ・夢みる魚——81
Ⅳ・小さな犯罪者——121
Ⅴ・長い夜の底で——159
Ⅵ・闇のなかの魚——198

装丁――――勝井三雄

装画・扉画―池田満寿夫

（函表紙画――「冬の蝶」
一九八〇年　番町画廊提供）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

ズボンの中の雲●池田満寿夫

連作長編小説

I

柳の秘密

1　柳

アナタハ　トウトウ見タワネ、ト女ノ人ガ言ッタ。
イイエ、見テイマセン、ト〈ボク〉ハ　アワテテ言ッタ。
イイエ、見タワ。ワタシノボボヲ見タワ。
見マセン、本当デス。
〈ボク〉ハ逃ゲルコトニシタ。最初一人デ追ッカケテ来タ女ノ人ガ、イツノ間ニカ三人ニナリ　五人ニナリ　九人ニナッタ。恐ロシイ急坂ヲ女ノ人タチハ〈ボク〉ノ直グ背後ニセマッタ。先頭ノ女ノ人ニ向ッテ上着ヲ投ゲタ。二番目ノ女ノ人ニハ　シャツヲ投ゲタ。
四番目ノ女ノ人ガ後ロカラ　トウトウ〈ボク〉ノパンツニ手ヲ掛ケタ。〈ボク〉ノ小サナオ尻ガムキ出シニサレ、冷タイ風ガ股間ヲ撫デタ。〈ボク〉ハ　パンツヲ脱出シ、オ尻ヤチンポコヲ出シタママ走ッタ。五人目ノ女ノ人ガ口カラ血ヲ流シナガラ追ッテクル。ドウイウワケカ〈ボク〉ハ　マダ靴ヲハイテイタ。片方ノ靴ヲ五番目ニ向ッテ投ゲ、残リノ片方ヲ

六番目ニ投ゲタ。

七番目ノ女ノ人ガ　スグ〈ボク〉ニ追イツイタ。投ゲルモノハ何モナイ。女ノ人ノ手ガ髪ノ毛ヲツカム。髪ノ毛ガ全部脱ケテ、女ノ人ハ尻モチヲツイタ。ソノ時スカートノ間カラ、女ノ人ノボボヲチラット見テシマッタ。ナメクジノヨウニ光ッテ黒カッタ。ダガ八番目ノ女ノ人ガ、モウ直グ後ロニセマッテイタ。〈ボク〉ハ、トリアエズ泣イテミルコトニシタ。泣ケバタイガイノコトハ許シテクレル。泣コウトシタガ涙ガ出テ来ナイノニハ困ッタ。大声ヲアゲル。ソレデモ涙ハ出ナカッタ。女ノ人ノ手ガ〈ボク〉ノ右腕ヲツカム。腕ガ抜ケタラ困ル。御飯ガ食ベラレナイ。本当ニ抜ケテシマウノダロウカ？　痛ミハナカッタ。ヤッパリ抜ケテシマッタノダト思ウ。左腕シカ見エナカッタカラ。ソノ左腕モ最後ノ九番目ノ女ノ人ガ握ッテイタ。

見タデショウ？　トソノ女ノ人ガ言ッタ。

イイエ、見テイマセン、アナタノボボハ見テイマセン、ト〈ボク〉ハ　今度ハ本当ニ泣キナガラ言ッタ。

見タケレバ、見セテアゲルノヨ。急ニ優シイ声デソノ女ノ人ガ言ッタ。

イイエ、見タクアリマセン。腕ヲ離シテ下サイ。オ願イデス。

イイエ、見ナケレバナラナイワ。

見タクナインデス。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

ドウシテ？
気持悪イカラデス。
ドウシテ？
光ッタナメクジノヨウニ黒イカラ。
ホラ、ヤッパリ、キミハ見タノネ。
イイエ、見テイマセン。
駄目ヨ、嘘言ッテモ。見タカラ、ソンナ風ニ言エルンデショウ？
見マシタ。デモ、ソレハ　オネエサンノデハアリマセン。
ワタシノヨ。キミハ　ワタシノヲ見タノヨ。
イイエ、違イマス。ボクノ見タノハ肥ッタオバサンノデス。コロンダ時、見タダケデス。
ソレハ　ワタシダッタノヨ。
違イマス。オネエサンジャナイ。オ願イデス。腕ヲ離シテ下サイ。
モウ離シテイルワ、ト女ノ人ガ言ッタ。左腕モナクナッテイタ。〈ボク〉ハ　悲シサノタメ泣イタ。涙ガ信ジラレナイホド沢山ムキダシニサレタ裸ノ腹ヤオ尻ノ上ヲ流レタ。涙ノ滝ノナカニ小サナチンポコガ立ッテイタ。先端ガ真赤ニタダレ、気持悪イホドヌルヌル光ッテイル。〈ボク〉ハ恥カシサノタメモット泣イタ。涙ガ薄緑色ニ変リ〈ボク〉ハ細イ一本ノ柳ニ変身シタ。小サナチンポコハ一本ノ小サナ枝ニナリ、ソノ先端ニ芽ガフイテイル。ソヨ風

デ細イ柳ガフラフラト揺レテイル。女ノ人ガ遠クノ方デ〈ボク〉ヲ呼ンダ。柳ガソヨ風デ揺レテイル。

2　地獄

中庭に細い柳が立っていた。

もっとも中庭といっても名ばかりで、四方が軒で囲まれた縦長の空地にすぎなかった。女給たちの洗濯縄が軒から軒へ縦横に張られ、公休日になると紅や白の下着類がぶら下がり歩行するのさえ困難だった。便所はその空地の一番奥まった処にある。〈少年〉にとって夜中に便所へ行くことは、この世の中で最も怖しくいまわしい冒険に属した。空地を横切る前にだだっ広い調理場を抜ける必要があり、調理場の手前にもう一つの小さな空地があった。その小さな空地に面した二間続きの部屋が〈少年〉と両親の住居になっていた。住居、調理場、女給部屋、ホール等を合わせると平屋のかなり大きな家屋だったが、便所はそこ一か所しかなかった。しかも現地式に大きな甕が埋め込まれ、それに二本の木材を渡してあるだけの物騒な、そしていつも汚物でよごれている場所だった。夏になると臭気が激しく調理場まで臭い、冬になると足場の木材が凍って足を滑らせないように命懸けでふんばっていなければならなかった。それでも昨年の冬、〈少年〉は足を滑らせて甕の中に墜落したことがあった。

幸いだったのは甕の中の汚物も凍っていて腰から下をよごしただけですんだことだ。だがこの足をふみはずした瞬間の恐怖は〈少年〉の記憶のなかから決して消えなかった。その事件があってから足場は多少改良されたが、もう体ごと墜落する心配はなくなっても、甕の中は依然として地獄に見えた。あの時〈少年〉は公休中の女給たちによって裸にされ、体中を洗浄された。女給たちは誰も真剣にはとりあわずげらげら笑いながら、〈少年〉のお尻やチンポコを大きなタオルで拭いた。タマエ姉さんが一番はしゃいでいたように思う。寒い朝だったので女給部屋の大きなダルマストーブの前に裸でたたされ、体を乾かす必要があった時は涙が出て仕方なかった。

——あら泣いているの？　とタマエ姉さんが言った。赤い襦袢の上に羽織をひっかけたタマエ姉さんは金歯を見せて笑っていたがいじわるに見えた。あの日何故オフクロがいなかったのか理解出来ない。

——ボンったら、まだふるえているよ、とカモメ姉さんが言った。タマエ姉さんのふとんのなかに入れてあげたら？

——奥さんもいないし、とキキョウ姉さんが言った。

3 桃

奥サンハ何処(ドコ)ヘ行ッタノ？　トタマエガ鸚鵡(オウムガエ)返シニ言ッタ。ハテネ？　ト桔梗(キキョウ)ガ首ヲ傾ゲタ。鴎(カモメ)ガ誰カサントネ？　何処ヘ行ッタ？　ト下品ナ声ヲ出シタ。旦那ハ誰？　ト桔梗ガ鼻ヲ天井ニ向ケテ言ッタ。ハゲ頭カ、憲兵カソレトモ若造カ、ト鴎ガ歌ッタ。コノ子ハ誰？　トタマエガ言ッタ。ボンボン、ト誰カガ合ヅチヲ打ッタ。ボンボンハ蛙ノ子？　ソレトモ鴎ノ子？　カモメガアラ厭(イヤ)ダ、ト言ッタ。クスグッタイヨ、トタマエガ言ッタ。ボンボンタラネ助平ナノヨ。ボンボンハ旦那ニ似テ助平ナリ、ト桔梗ガ白粉(オシロイ)ヲツケナガラ言ッタ。目ノフチガ変ニ紅クオバケノ顔ニ見エル。タマエガマタクスグッタイ、ト言ッタ。〈ボク〉ハ何モシテイナイノニ。〈ボク〉ハ何モシテイナイ。タマエダケガ体ヲクネラセテイル。襦袢ノ中ノタマエノ桃ガトテモ熱イ。〈ボク〉ハ何モシテイナイノニ、皮ヲムイタ桃ガ〈ボク〉ノオ尻ニ密着シテイル。アンマリ可愛ガルト奥サンニ言イツケルワヨ、ト鴎ガ言ッタ。タマエガフトンカラ首ヲ出シテ赤イ舌ヲ出シタ。〈ボク〉モ首ヲ出シタ。舌ヲ出シテゴラン、トタマエガ言ッタ。〈ボク〉ハ言ワレルママニ舌ヲ出シタ。タマエノ舌ノ先端ガ〈ボク〉ノ舌ノ先端ニ触レタ。大キナ水蜜桃ガ〈ボク〉ノ口ノナカデ破裂シタ。

4　目撃

中庭の柳は一年経ってもほとんど生長しなかった。誰も水をかけようともしなかったし、誰も気にしなかった。〈少年〉は時々柳の根元に小便をしてやった。してやったと言うのは、それが柳のために肥料になると信じていたからである。勿論それは昼間でも中庭に人影のない時に限られた。

中庭が活気づくのは夕刻からである。昼の間ホールは開店休業のようなものだった。当番の女給ががらんとしたホールのカウンターで月遅れの「キング」を読んでいるか、〝リンゴの樹の下で〟のレコードをくり返し鳴らしているにすぎなかった。それでもまれには昼間から客がいる時もあった。昼間の客は民間人に限られていた。時には長靴をはいた将校がいた。ホールが兵隊や下士官たちでいっぱいになるのは夕方の七時を過ぎてからだった。女給部屋は空っぽになり、オフクロは調理場かカウンターにいた。オヤジはたまにどこかから帰っている時もあったが大抵は不在だった。それでも帰っている時のオヤジは女給たちにいわせれば若旦那然として彼女等に人気があった。東海林太郎に似ているとオヤジ自身思っているところがあった。

〈少年〉は調理場に入ることも、ホールと女給部屋をのぞくことも禁じられていたが、便

所へ行く時だけは調理場を通らなければならなかった。宵のうち中庭を横切ることは〈少年〉にはちょっとした楽しみだった。ホールからもつれ合って出てくる下士官と女給が中庭で抱き合っているところや、柳の横で兵隊がキキョウの頬をなぐっているところ、などが見られたからである。柳の根元でカモメがすそをまくって、しゃがみ込みオシッコをしている姿を目撃した時は心臓が高鳴った。月夜だったので月と同じくらい丸いカモメのお尻が輝いて見えた。カモメは酩酊していた。内地にいればまだ女学生でいられたのに、どうして外地へ来たのか〈少年〉には理解出来なかった。顔が薄黒く頬だけが異様に紅かった。薄黒いくせにカモメという源氏名をつけているのが、〈少年〉にはおかしかった。顔が薄黒いのにお尻があんなに白く光って見えたのは不思議だ。カモメはふらつきながら立ちあがると今度は急に咳き込みまたしゃがんだ。何かを吐いているようだった。タマエがホールの扉を開けて中庭に出て来た。喧騒と靄のような煙とがタマエのあとから空地へ押し出された。開かれた扉から見たホールの内部はまぶしすぎて判然としなかったが、数人の兵隊が上半身裸で踊っているのだけがまばたきと同じ速さで横切って消えた。誰かが素早く内側からホールの扉を閉めた。

——大丈夫？　とタマエがしゃがんでいるカモメに言った。

——姉さん放っておいて、とカモメが言った。

——無理して飲んだら駄目よ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo